

優劣をつけ難い水準に達し、体重も10~20才では消費者世帯を上廻っている。

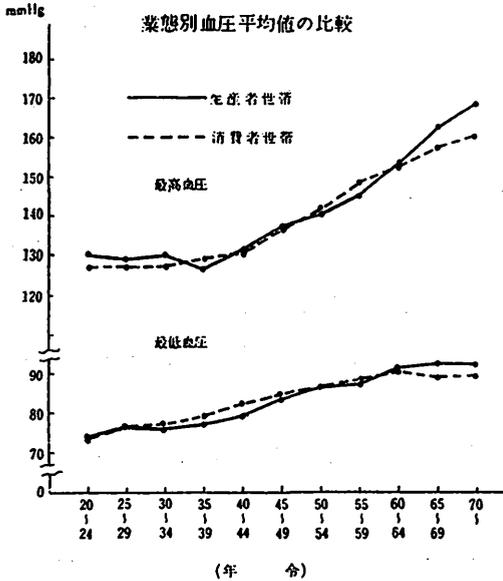
7) 血圧 (業態別)

昭和37年度の血圧平均値の成績を業態別に比較すると第13図のとおりで、業態間には特に大きな差異はみとめられない。

ただ、60~64才をこえると消費者世帯は上昇率が鈍化するのに対して生産者世帯は消費者世帯を上廻る上昇をつづけて70才以上では最高血圧168mmHg、最低血圧92mmHgに達する。

なお、性別にみても男女間で特に大きい差はみられない。

第 13 図



第43表-1 う歯の業態別発現率

	男	女	
生産者世帯	有 症 率	74.1%	77.4%
	1人当り本数	5	6
消費者世帯	有 症 率	76.2	80.1
	1人当り本数	5	6
その他の世帯	有 症 率	71.3	77.7
	1人当り本数	5	6

第43表-2 欠損歯の業態別発現率

	男	女	
生産者世帯	有 症 率	36.4%	44.3%
	1人当り本数	9	11
消費者世帯	有 症 率	36.7	43.5
	1人当り本数	7	9
その他の世帯	有 症 率	36.5	43.6
	1人当り本数	12	12

8) 歯牙異常 (業態別発生率)

歯牙異常を各業態にわけて観察してみると、う歯の有症率の平均値では消費者世帯の男子が76.2%で最も高く、次いで生産者世帯は74.1%、その他の世帯71.3%となっている。

女子は消費者世帯が80.1%で最も高く次いでその他の世帯77.7%、生産者世帯77.4%であり、消費者世帯は男女ともに最も高い有症率を示している。

C 国際比較からみたわが国の栄養水準

1) 国際比較からみた栄養状態

次に国民の栄養状態は諸外国と比較した場合にいかなる地位におかれているかを考察してみよう。

ただ、わが国が実施している国民栄養調査の如き消費統計は諸外国では行なわれていないので、外国のものはすべて食糧バランスシートから算出したものである。

この食糧バランスシートとは、ある一定の期間内における食糧の各種目別の生産量、輸出量、在庫変動等により食糧の総供給量を推計し、これから飼料用、工業用、種子用、減もう量等を差し引いて、その年次に食糧として消費する純食糧の量を推計し、更に各食糧のもつ栄養量から国民1人1日当りの摂取量

を算出したものである。

従ってバランスシートによる食糧供給量はあくまでも供給しうる量であって、かならずしも現実に消費された消費量とは一致しないことに留意する必要がある。

第44表 1人当り年間食糧供給高 (単位=kg)

国名	食品名	豆類	肉	油脂	年次	卵	魚
アルゼンチン		2	91	16	1959	7	2
オーストラリア		4	106	15	※1960/61	10	5
ブラジル		27	29	8	1957	3	3
カナダ		5	79	19	1960/61	16	8
セイロン		29	2	4	※1961		
デンマーク		5	65	28	1960/61	10	16
フランス		6	73	18	1959/60	11	6
西ドイツ		3	57	25	1960/61	13	7
ギリシヤ		14	23	18	※1960	6	8
インド		24	2	4	1960/61		1
イタリア		9	27	17	1960/61	9	5
日本		18	6	4	1960	5	23
オランダ		4	49	26	※1960/61	12	4
ノルウェー		4	38	24	※1960/61	8	19
パキスタン		5	4	3	1960/61		
フィリピン		6	14	4	※1960	3	15
アメリカ		7	95	21	1960	19	5
トルコ		15	13	8	1959/60	1	2
ユーゴスラビア		10	30	14	1960		
イギリス		6	73	22	1960/61	15	10
アラブ連合共和国		10	13	5	1957/59		
スイス		7	58	20	1960/61	10	3

(注) 1) 世界経済統計年鑑1962版に伝る
2) ※印は暫定数字である

第45表 1人1日当りカロリー

国	年	熱量			国	年	熱量		
		総計	動物性食品の占める割合	蛋白質			総計	動物性食品の占める割合	蛋白質
オーストラリア	※1960/61	3,160	42	90	パキスタン	1960/61	1,970	8	45
ブラジル	1957	2,680	17	67	フィリピン	※1960	1,950	9	51
カナダ	※1960/61	3,100	43	94	ポルトガル	※1961	2,420	16	76
デンマーク	※1960/61	3,330	43	93	南アフリカ	1959/60	2,550	22	74
フランス	1959/60	2,990	—	99	スペイン	※1960/61	2,720	16	75
西ドイツ	※1960/61	2,950	35	80	スウェーデン	※1960/61	2,920	42	81
インド	※1960/61	1,990	6	53	スイス	※1960/61	3,190	34	89
ギリシヤ	※1960	2,930	13	95	トルコ	※1959/60	2,830	11	91
イスラエル	1960/61	2,800	17	84	アラブ連合共和国	1957/59	2,530	7	73
イタリア	※1960/61	2,740	18	80	アメリカ	1960	3,120	40	92
日本	1960	2,240	9	69	ベネズエラ	1960	2,490	15	66
メキシコ	※1957/59	2,440	18	68	ユーゴスラビア	※1960	3,070	23	96
オランダ	※1960/61	3,070		82	ベルギー	1959	2,050	13	51
ニュージーランド	1961	3,510	51	109	パラグアイ	1957~59	2,500	19	68
ノルウェー	※1960/61	2,980		82					

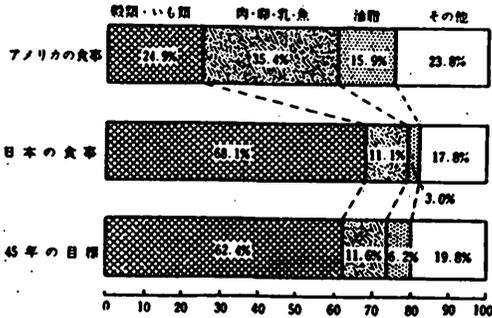
(注) 1) 世界経済統計年鑑1962版に伝る
2) ※印は暫定数字である

この食糧バランスシートの数値によると1人1日当り摂取熱量はニュージーランド、デンマーク、アメリカ、カナダ、オランダ、スイス等の欧米の諸国では、3,000カロリーを上回る摂取量を示し、次いでフランス、西ドイツ、ギリシャ、スウェーデン、ノルウェー等が2,900カロリーを上回り、これら各国は蛋白質についても、いずれも80~90gをこえる摂取状態を示している。

パキスタン、インド、フィリピンは2,000カロリーに満たず蛋白質も40~50g前後で最低位に属する。

第 14 図

日本の食事とアメリカの食事



注) 日本は37年度国民栄養調査により算出
アメリカはFAO1960年資料により算出

穀類、いも類等の澱粉性食品を中心に栄養をとっていた食生活の形態から漸次抜けだして、肉、卵、乳等動物性食品、油脂、果実等の消費が増加しつつある。

しかし、国際比較の観点からみた、消費水準は第15、16、17図にみられるとおり、非常に低い水準にあることが明らかであり、これは、唯単に所得水準の低いことだけをもって説明できるものではなくこれには、日本人の食生活が欧米諸国に比べて、栄養の給源が著しく米に偏している特異な食事形態であることに起因しているものと考えられる。

すなわち、諸外国では、所得水準の向上によって食生活水準の上昇は一般には動物性食品の増加という形であられるのに対してわが国では、米に対する嗜好、愛着習慣は他の国民が穀類に対しても嗜好とは著しく異なるものであるため、わが国経済の発展速度に比較して動物性食品の摂取水準は、緩慢であったとも考えられるのである。

なお、昭和37年度成績から食糧消費について考察してみると米を主とする穀類の消費は、この1~2年は若干減少の傾向を見せはじめており、反面動物性食品が大巾な増加を示してきたことなどを併せ考察すると国民の食生活はようやく、米中心の食生活から抜けだして欧米諸国並に動物性食品の摂取増加という

このような国際的系列の中で、わが国の占める地位をみてもと摂取熱量、蛋白質ともに、かなり低位のグループに入っていることがわかる。

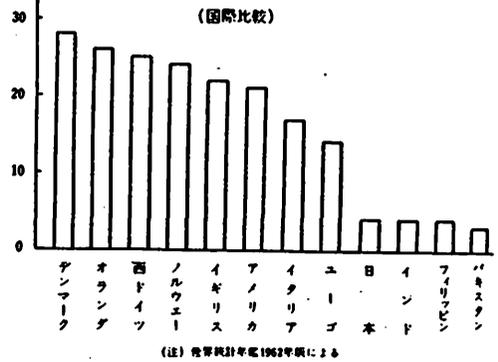
もちろん、栄養の摂取量は体格、体質、気候条件生活環境等のほかに経済条件によっても大きく左右されるものであるから、単なる比較はできないとしてもわが国の摂取量は欧米諸国に比べて著しく劣っているといえよう。

2) 国際比較からみた食糧消費

わが国の食糧消費傾向は国民所得の向上や生活水準の上昇に伴って緩慢ながら確実な向上をみせて、

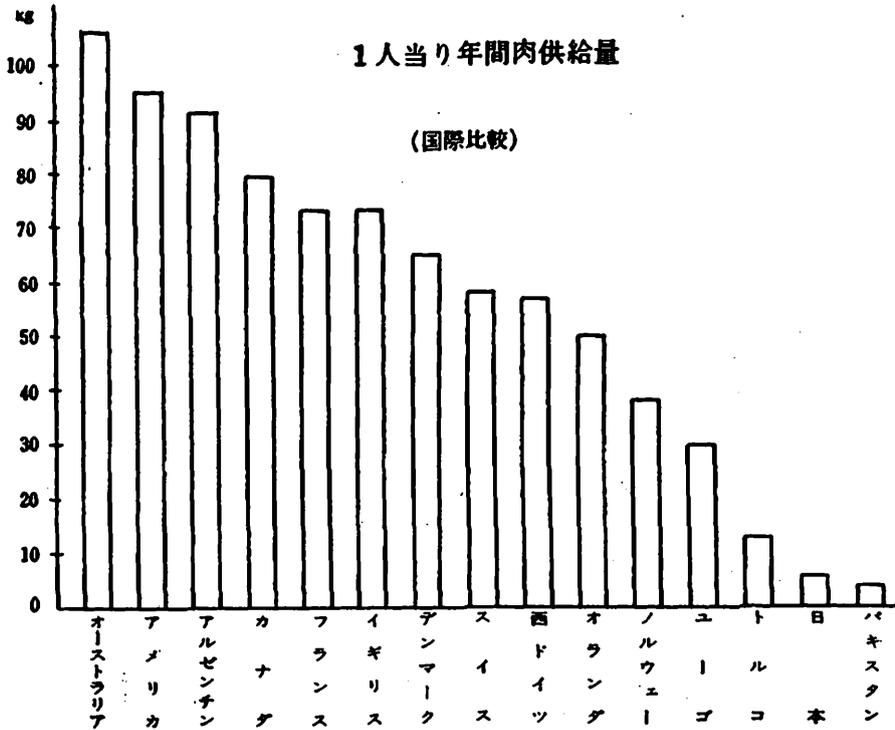
第 15 図

1人当り年間油脂の供給量



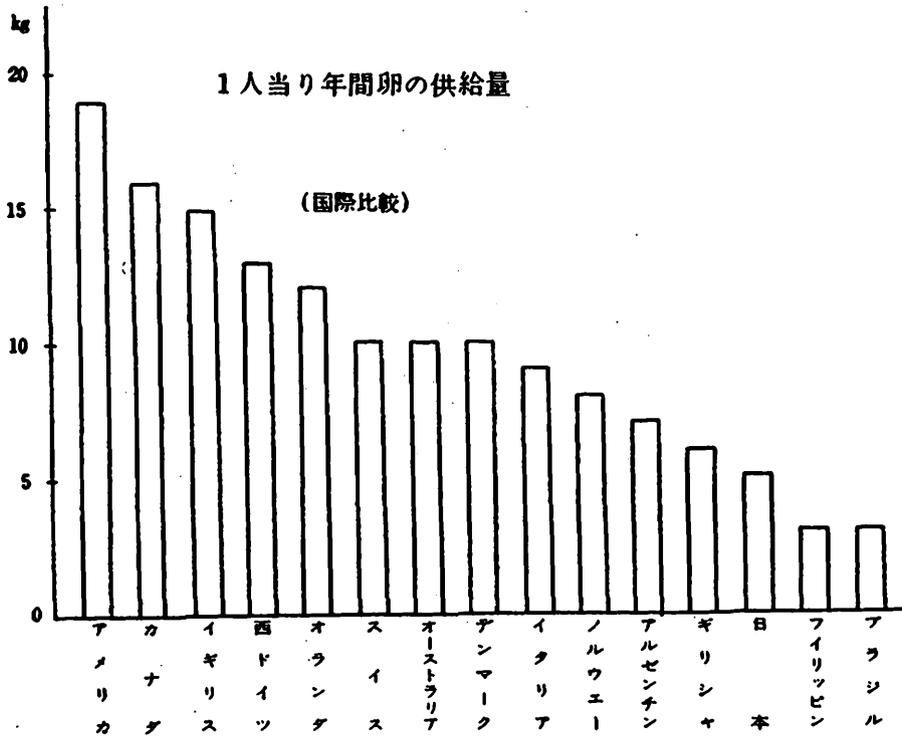
(注) 世界統計年鑑1962年版による

第 16 図



(注) 世界統計年間1962年版により作成

第 17 図



(注) 世界統計年間1962年版による

形であらわれてきたものと推定される。